

弥山の描かれ方の変容と神仏分離

巖島（宮島）の最高峰である弥山の山頂部には、約3から6メートルの巨岩が十数個も林立もしくは折り重なっている。この光景を目の当たりにしたものは、誰しもその偉容に目を見張ることになるであろう。近代になると識者たちはこの巨岩群を、原始信仰に関わらせて理解するようになった。弥山の山頂部にある巨岩群を、神が天下った「磐座」（依り代）と考えるのである。

ただ、弥山について細かな説明を加え、『巖島道芝記』（1697年成立）・『芸藩通志』（1825年成立）・『巖島図会』（1842年刊）などの江戸時代の地誌では、山頂上部のこの巨岩群についてほとんど触れていない。わずかに「頂上石」とその存在を記すのみである。なお、『巖島図会』に収載された「弥山全図」の画中詞には、これとは別に「頂上カベシロ岩」という表現がある。これは弥山の山頂部に聳え立つ、いわゆる「壁白」のような巨岩という意味であろう。18世紀末頃から昭和前期にかけて、宮島や弥山を描いた巖島絵図が何度も刊行されるが、文化4年（1804）の「巖島弥山細見之図」（図1）からは、弥山山頂に「頂上カベシロ岩」という巨岩が一つ描かれる。



図1 巖島弥山細見之図(1807)



図2 日本三景の一 巖島実地真景之図(1897)

しかし、弥山の山頂部を代表するのはこの巨岩ではなく、私に「弥山本堂」とも呼ばれた毘沙門堂もしくは求聞持堂であった。明治初年の神仏分離令発布以降になると、これらの仏堂は大聖院に帰属するようになり、巖島絵図の弥山山頂部の描き方も従来とは大きく様変わりする。弥山山頂の巨岩のみ極度に肥大化して描かれ（図2）、山頂部が噴火で生まれた大きな瘤のようになっている。巖島神社本社の背後に作られた鎮守の森、後苑（うしろぞの）も、これに呼応するかのようには誇張して描かれている。そして、巖島神社本社と後苑と弥山の山頂の巨岩が、一本の線で結ばれているような配置になっているのが分かる。以上のように3地点が強調された描き方は、神仏分離令発布以前の巖島絵図には見られなかった現象である。

ゆえに、巖島神社の祭神が天下ったところが、弥山山頂部の巨岩群であるという近代以降の説明は、新たな神話的解釈ということにならざるをえない。

（松井 輝昭）

（「宮島学センター通信」第4号・2013年3月）